

---

# 潮騒の記憶

梅本利雄

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

潮騒の記憶

### 【コード】

N6889C

### 【作者名】

梅本利雄

### 【あらすじ】

哀しい伝説を主人公の僕が知ったのは、予定外の休日を通すことになった西伊豆のことでした。説明してくれたのは友人のハルヒコの彼女、日焼けした肌で、気さくに話しかける香澄という女性です。ひと夏の物語をぜひ読んでください。

(前書き)

仕事にあけくれている主人公僕と、以前付き合っていた彼が死んでしまい悲嘆にくれる香澄とのひと夏の物語です。ぜひ読んでください。

彼女が伝兵衛と小雪の伝説を話してくれたのはいつのことだったろう。

僕と彼女が堂ヶ島のきれいに整備された舗装道路を歩いていた時だったろうか。彼女の長い指は、その時、記憶の中で小さな島を指差していた。

思い出せる彼女との思い出は、わずかしかない。その日の太陽は、二人を鋭い日差しでさしていた。波の音が時に激しく、そして時に優しく僕らを包んでいた。島の緑が波光にきらめき、スポットライトの中を浮かび上がるようにそこに存在した。時折、海鳥が空に漂っているのが見えた。彼女の艶やかな唇が動く。

「あの島には伝説があるの。源平の争いが続いていた頃、傷ついた源氏の若武者の一人が、地元の豪族に助けられてあの島にかくまわれていたの。平家の目を逃れ、源氏の復興だけを信じて生きていた男にまつわる話よ」

僕はその時、曖昧にうなずいていたのではないだろうか。それは、地域の歴史にはあまり関心がなく、仕事からの開放感に包まれていたためかもしれない。しばらく歩いていると、ぼんやりとしている僕の右袖を軽くつまむようにして、引つ張った。微かな声で「あれ見て」といい、近くの海面を指差した。島の中心から、堂ヶ島の海岸まで、淡く黄緑色の絨毯が敷かれているかに見える。彼女の横顔を見た。長い髪に日焼けした肌、わりと切れ長の眼からは、少女のような瞳が見えた。年は二十台半ばであろうか。落ち着きのある言葉と、少女のような容貌のアンバランスに、不思議と好感を持った。彼女は右手で長い髪をかきあげる。黒髪が空に広がり、その一本一本が滑らかに弧を描いて元の場所に戻っていった。

「何、あれ？」

僕が訊くと彼女は微笑んだ。太陽はまぶしく、二人を照らしている。

「臍の緒よ」

「臍の緒？」

「そうよ。干潮の時にだけ繋がる臍の緒。見てて、あと一時間もしないうちにすべて繋がるわ」

彼女は手の甲で額の汗を拭いた。長い髪がまた微かに揺れる。

「ということは、毎日、この島は母胎との間を行ったり来たりするわけ？」

彼女はあごを左手の人差し指で触れると、また右手で髪をかきあげた。

「でも、ちよつと違う気がするわ。正確に言えば、毎日、切り離される島なの。余程の大雨でもない限り、陸と陸は繋がりが、そして、必ず切り離されるの。そこには繰り返される痛みしかないわ。しかも、そんな痛みも、気がつくと消えていくの。そのうち、繋がっているのか、離れているのかわからなくなるの」

「……悲劇だね」

「そうね」

彼女は少しだけ微笑むと、左手の人差し指を下唇にあて、左右になぞった。

「そう、あの島の伝説の話だけど」

「源氏の若武者」

「うん。そう、伝兵衛という若武者よ。その男が三四郎島に隠れて傷の手当てをしている間、地元の豪族の娘で、小雪という娘が毎日のように面倒を見てくれていたの」

僕は焼け付く太陽を、手をかざして見上げた。久しぶりに太陽の光を浴びる気がした。一瞬、軽いめまいがしたが、それはすぐに消えていった。僕はその時初めて、あの陸と鎖で繋がれようとしている小さな島が「三四郎島」という呼び名があることを知った。伝

説には若い男と女が必要だった。日に一度だけ繋がる孤島に住む若者と、純真無垢で誠心誠意を持って介抱を続ける地元の娘。何度か二人の姿をイメージしようとしたが、あまりにも現実味が無く、すぐに止めてしまった。彼女はまた、僕の袖を軽く引っ張った。

「ねえ、見て。何かわかる？」

孤島とこちらを結ぼうとする鎖の中に、微かに揺れ動くものがあった。それは多くの蟹が浜辺を群れ動くかのように見えた。立ち止まり、じっと目を凝らした。

「何？」

「人よ」

それは、多くの観光客らしき人々が、三四郎島へ続く一本道を所狭しと蠢いている光景だった。小さな人の影は、不規則に揺れ動いていた。

「伝兵衛と小雪は恋に落ちたの。絶望しかない現実の中でよ。源平が争いを続ける時代の中、伝兵衛はただ源氏が再興することだけしか信じていないの。この恋がいつか時代の嵐の中で引き裂かれることも、なんとなくだけとお互いに感じてるの。だから、必死に答えを求めようとするの。きつと、美しい愛だったと思うわ」

影の群れが、島への道の中を揺れ動いている。

「それで？」

「小雪は消えてしまったわ。この海の中によ」

彼女は海を見つめた。波は音を立てると、彼女の側になやつてきた。まるで白い人影が彼女の足を掴むようだった。

「小雪はね、ある嵐の日に、父のところへ届いた源氏の出陣についての書状を抱きしめてね、伝兵衛のところへ必死になって走ったの。戦への出発を心待ちにしている彼のいる島へよ。その途中で小雪は波にのまれて消えてしまうの。二度と生きて戻ることには無かったわ」

彼女は僕の顔を見ると、首をすくめる仕草をした。

「自殺？」

「わからないわ。でも、事故みたいよ。書状を届けることしか考え

ていなかった彼女を襲った……」

「小雪は、伝兵衛にこの島に残って欲しかったはずなのに、止めようとは思わなかったの？ 例えば書状を隠すとかさ」

「そうね。私も小雪ではないから……。でも、きつと彼女は快く男を見送ったと思うわ」

「どうして？」

「多分それが、二人の宿命だからよ」

「宿命？」

「そうよ。誰もが宿命には逆らえないわ。決して、ハッピーエンドにはなりえないの。だからこそ、伝説になるの」

彼女はそういうと近くににあった石を拾い、海原めがけて投げつけた。それはきれいな放物線を描き消えていった。

「……伝説か」

「この島の伝説には、不思議な力があるの。どこか人の心を捉えて離さない力よ。私もどうやら、この島に引き戻されたのかもしれないわ。今も海の中を彷徨う、小雪の魂のようにね」

彼女は太陽の日差しを受けながら微笑んだ。僕は何も答えることができず、顔を見つめるだけだった。波が人魚の尾鰭のようにきらめき、反射をくりかえした。揺れ動く人の群れと、島に生い茂る緑の塊が、僕らの瞳の中で動いている。

西伊豆に滞在することになったのは、まさに偶然そのものだった。

外資系のコンサルタント会社の仕事に日々追われていた。特に最近まで担当していた巨額のプロジェクトは、体を完璧に蝕んでいた。私生活と仕事の区別など無い。短い睡眠と仕事現場の往復が、与えられた世界の全てだった。砂漠の中を這い回るような日々を終えた時、待っていたのは、突然の二週間の休暇だった。

僕は大学時代の友人であるハルヒコに、奇跡的な十四日間の休暇について電話をした。

彼はその後で、二日後にダイビングをしに西伊豆に行くが、一緒にどうかと誘ってくれた。現地には知人もいるし、二、三日なら骨休みになるはずだ、と明るいい声で言った。ハルヒコは僕が泳ぐことができないことを知っていた。ダイビングに誘わなかったのは、彼なりの優しさでもあった。結局、何の目的も無いまま、誘いを受けることにした。

ハルヒコの車は西伊豆の松崎という地域にさしかかると、道沿いの駐車場にとまった。すると、助手席の窓をノックする女性がすぐに現れた。長い黒髪に、日焼けした肌がある。ハルヒコはその女性を笑顔で紹介した。薄い唇の中から、大きめの白い八重歯が見える。車の外に出ると、ハルヒコと彼女はしばらく話をしていった。

「この娘は香澄っていうんだ。地元の松崎の娘だから、案内してもらおうといい」

頭を下げると、彼女は額を軽く人差し指で掻く姿をした。小麦色の肌と笑顔が太陽の日差しの中、笑い声とともに動いていた。

僕らは昼食をとるために、ハルヒコの勧める近所の地魚料理店の中に入った。

中央にカウンターが広がり、髪をタオルで束ねた女性が立っていた。

壁一面に芸能人の色紙が張られている狭い座敷に座ると、注文をした。すぐに、奥から若い男性が料理を運んできた。ハルヒコはそのアルバイトらしき青年の背中に軽く触れた。男は黄色いエプロンをしていた。短い髪が店に差し込む光に輝く。青年は、ハルヒコの方を向くと笑顔になった。ハルヒコは親しそうに手を振って挨拶をした。

「どう、タクさん仕事には慣れた？」

「おかげさまで」

青年は満面の笑顔で店の奥の方へと戻って行った。ハルヒコは僕にそっと耳打ちした。

「あの男、オレらと同じ年なんだ。伊豆に魅せられて、ここの所よ

く伊豆に来ているんだ。この店も無料で手伝っているらしい。伊豆から離れられない一人さ。週末になると伊豆にやって来る。もしかしたら、オレと同じなのかもしれないな。お前の家の近くに住んでいるそうだ」

ハルヒコとともにここまで来た長い行程を考えると、常識的なこととして認めるのは難しかった。

「本当さ。毎週、都内から高速に乗って、伊豆に来るのさ」  
「信じられないな」

「それはそうだよ。この間、タク本人が、信じられないって話していたからな。やはり伊豆にはどこか魅力があるんだよ」

ハルヒコはそういうと、最近あったダイビングの出来事について香澄と話し始めた。タクという青年の後姿を何気なく店の中に追った。彼は汗を流しながら、懸命に店の仕事を手伝っていた。都心から毎週のように伊豆の人々に会いに来る彼の存在を、ただ好奇の目で見つめることしかできなかった。

ハルヒコはしばらくすると、ダイビングの仲間たちと打ち合わせがあると告げ、二人を残して出かけて行ってしまった。彼女は右手で長い髪をかきあげ、耳を出した。その白く長い指の間からは、ふくよかな耳が見えた。

「君はダイビングには行かないの？」

眉が一瞬動き、首が左右に揺れた。

「私、最近、ダイビングはやってないの。ねえ、ところでこちら辺で何処か行きたい？ 希望とかある？」

彼女はそういうと、グラスに口をつけた。

「……海」

何気ない言葉だった。海を最近ゆっくり見た気がしなかったからかもしれない。また、ハルヒコの車の中に広がっていた磯の香りが、僕の心を刺激していたからかもしれない。香澄は口に含んでいたものを吹き出しそうになり、慌ててグラスをテーブルの上に置いた。

「変わった人ね。ここに居ればいつだって見えるわ。見たくなくて  
もよ」

彼女はそういうと話を続けた。天窓洞という観光地のそばで働いていること。ハルヒコとは以前、東京都内で働いている時に知り合ったこと。以前はよくダイビングに行ったことなど、楽しそうに話した。

それが僕と香澄との初めての会話だった。彼女は、明日の仕事は休みなので、車で地域の観光案内してあげると言い、待ち合わせ時間を一方的に決めた。一通り話が済むと、彼女の黄色いクーペに乗せてもらい、近所の民宿へと行った。

その夜、潮騒を聞きながら、久しぶりに海を間近に感じた気がした。時間がゆっくりと流れていることを、僕の肉体は全身で受けとめているようだった。波の音は、いつまでも耳の中でこだまを続けていた。

翌日、黄色い車が、民宿のそばにとまった。彼女は薄いオレンジ色のサングラスをかけ、紺のジーンズに白いシャツを着ている。僕の姿に気づくと軽く手を振った。

「何が見たい？」

「何処でもいいよ」

「何か御要望は？」

「じゃあ、……海」

「変な人ね。そこにあるじゃない」

彼女は海岸線を指差して微笑んだ。遠くに岩礁にあたり、飛沫を飛び散らす波が遠くに見えた。

車は海岸沿いの道を走り続けた。岸壁にぶつかる激しい波は、白い矢を飛ばしていた。車は青い海と緑に挟まれた空間を走り続けて行く。

「ねえ、ここには何日ぐらいいるつもり？」

彼女はギアに手をかけ、遠く前を見つめていた。白いシャツか

らはレモンイエローのブラが微かに透けて見えた。

「何も考えていないんだ。とりあえず、気に入ったから、しばらくここにしようと思う」

「馬鹿ね。ハルヒコの周りって、どうしてこんな変な人ばかり集まるのかしら。計画性がまるでなくて……、子供ばかり」

返答に困り、目の前に広がる景色をじつと見つめた。左側に現れるガードレールは僕の体を掴むかのように飛び出し、そして通り過ぎていった。彼女はしばらく何かを考えているようだった。会話が途切れ、クーペの中には沈黙だけが走り続けた。

「こうしたら……」

軽いなだらかな丘を通り過ぎたところで、彼女は言った。

「明日から家に来なさいよ。最近、母がやっとの思いで手に入れたマイホームで、きれいなよ。ちょうど部屋も一つ空いているし、ちょうどいいわ。どうかしら」

突然の提案に戸惑った。何度か「どう？」という言葉が響く。そこには、遠慮の気持ちだけがあつた。少しだけ車の窓を開けた。車内に吹き込む爽やかな風の中に、微かに潮の香りを感じた。

「遠慮なら要らないわ。宿泊料だって馬鹿にならないでしょう。ここにしばらくいるなら、その方がいいわ。家はここから歩いてすぐのところよ」

考えるのが面倒になり、ただ外に広がる景色を見ていた。

「それと、少し頼みがあるの」

彼女の潤んだ瞳の中に、自分の姿が微かに見えた。

「家には不足しているものがいっぱいあるの。特に今必要なのは、犬の運動と母の話し相手よ。どう？ やってくれる？」

何故か脳裏にハルヒコの顔が浮かんだ。

「週末にはハルヒコも私の家に遊びに来ると言ってたわ。…じゃあ、決まりね。明日、迎えに行くから……」

返事を聞かないまま、彼女はハンドルを握り締めて、何度かうなづいた。ハルヒコのことになったが、断る理由は一つも浮か

んで来なかった。どうでもよかった。車の窓からは『堂ヶ島』と書かれた看板が見え隠れし始めていた。建物の波の間にきらめく海が見えた。褐色の波、光の鏡の共演。

「……あなた、死にたいと思ったことある？」

冷静に顔色一つ変えることなく、質問をしてきた。

「わからないな。そういう時はあったかもしれないし、無かったのかもしれないし」

彼女は「そう」とだけいうと、サングラスを右手で軽く触れた。「正直言うと、私、ずっと死にたいと思ってたわ。生きていたってしょうがない気がずっとしてた……」

言葉が浮かばなかった。

「何となくよ。でも、女手一人で育ててくれた母のことを思うと、死ねなかつたわ」

車の中に沈黙が走った。それは時の流れをイメージさせるほど長いものだった。青空が、前にただ広がっていた。

「……嘘よ。信じた？」

香澄はしばらく笑った。海岸に続く土産物屋らしき建物が多くなると、黄色いクーペは駐車場へと入っていった。車を停めると香澄の長い黒髪が微かに揺れた。

「深刻にならないで、ジョーク、ジョーク。今まで死のうと思ったことなんて一度も無いし、それについて考えたことすらないわ。ハルヒコの話し通りだわ。あなた、本当に真面目ね」

エンジンを切ると、彼女は「行きましよう」と車のドアを開けた。香澄に離されないように、強い日差しにさらされながら歩いた。潮の香りが体の中に染み渡るようだった。波の音が聞こえる。彼女のサングラスが太陽の光に輝いた。香澄の白くて長い指が、まるでスローモーションのようにゆっくりとあがっていく。

「あの島には伝説があるの。源平の争いが続いていた頃、傷ついた源氏の若武者の一人が、地元の豪族に助けられてあの島にかくまわ

れて……」

彼女の長い指は小さな島を指差していた。太陽は、二人を鋭い日差しで突き刺していた。

二

香澄の家に泊まるようになり、三日が経とうとしていた。

僕はその間、日中は本を読み、夕方になるとジローという名のビートル犬と散歩をし、夜には香澄とその母の三人で食事をとった。毎日のように、香澄は仕事での出来事等を話し続けた。僕はただ黙ってうなずいた。香澄の母親は夕食の間もテレビの画面に夢中で、話半分だった。

その日、夕食の片付けをしながら、週末にハルヒコが来たら、どこかに出かけようと彼女は弾んだ声で言った。僕はただ「そう」と答えると、彼女の母が座るそばに腰をかけた。気をつかっているのか、大半は自分の部屋へ行くことが多かったが、その日、茶の間でテレビを見ていた。しばらくして、香澄が急用で出かけると、二人だけの重苦しい時間が続いた。

「あんたが来てくれて、香澄は明るくなったよ。ありがとうね。ここ半年、全く会話なんか無かったからね」

突然、テレビの画面を見つめたまま、彼女の母は言った。それは空耳かと思うほど小さな声だった。

確かに夕食時に話す香澄の姿は明るかった。それは一人で語り始め、一人で納得し、最後には一人で笑う舞台でもあった。周りとは関係なく話は進められ、夕食の片付けが終わるまでやむことは無かった。香澄の母が言う、彼女の全く話をしない日々など、想像すらできなかった。

「本当ですか」

ブラウン管を見つめる女性の背中に、話しかけた。

「本当さ。あの事故以来、全く話すらしようとしなかったからね」  
体の中に「事故」という二文字が、静かな波紋のように広がった。

「事故って？」

その女性は僕の顔を見つめた。表情を変えずにテレビを見つめる目元に深く入った皺は、動かなかった。

「知らないのかい。そう。香澄の彼でね。婚約していた真面目な青年がね。ダイビングとやらをやっていて、そのままポツクリ逝っちゃまったそうなんだ。そりゃ、可哀想だったよ。うちの娘も随分泣き続けて、長いこと話すことすらできなかったからね」

「……いつのことですか」

「もう一年経つかね。その死んだ彼氏の名前も、あの犬と同じ、ジロって言うんだよ」

散歩している時の愛嬌のある犬の顔がすぐに思い浮かんだ。だが、そのつぶらな瞳と、ダイビングで死んだ香澄の婚約者を関連づけて考えることはできなかった。

しばらくすると、沈黙を破るように香澄の声が聞こえてきた。それは無邪気な少女が声をあげたかのように、とても明るかった。香澄の母はしばらくすると静かに奥の部屋へと入っていった。

週末を迎えると、香澄のいう通り、ハルヒコは伊豆に来た。その日、彼の強い希望もあり、三人で地域の花火大会を見に行くことになった。香澄はあまり乗り気ではなかったが、ひょうきんなハルヒコの態度に屈し、彼女の運転で花火会場へと向かうこととなった。公園のグラウンドに、町内会で用意した屋台が数軒並んでいる。グラウンドの隅に座り、僕らは花火が始まるのを待つことにした。花火大会と催し物はセットになっているらしく、特設のステージ会場では、二人の司会が進行をつとめていた。

そこでは、地域の子供たちが、「サッカーボール蹴飛ばし競争」に次々と参加していた。内容はいたって簡単で、サッカーボールを

蹴り、その距離を競うものだった。僕等はほのぼのとした光景に大笑い繰り返した。特に香澄は女の子が最後に男子を追い抜いて優勝すると、手を叩いて喜んでいた。その後、地域の盆踊りが続き、ハルヒコの期待する花火は、思ったよりも呆気なく終了した。

それから僕らはカラオケボックスへ行き、随分と歌い、楽しんだ。帰宅した頃には深夜の一時を回っていた。寝ている香澄の母に気をつかいながら、彼女の家へ入った。そして、自分が泊めてもらっている部屋に入ると、香澄は冷蔵庫から持ってきた缶ビールを飲み出した。僕とハルヒコは、勢いよく飲む香澄の姿にあっけにとられた。

「飲めないのかと思った」

「これでも結構強いだよ。運転があって飲めないから、随分今日はストレスが溜まったわ……」

ハルヒコは香澄の姿をぼんやり見つめながら「元気になったな」と、つぶやくように言った。

「そう？　まるで病人みたいに扱われないでくれる？」

彼女は笑顔でハルヒコを見つめ返した。開かれた網戸の外からは磯の香りを含んだ心地良い風が吹いてきた。微かに波の音が聞こえる気がする。ハルヒコはビールを勢いよく飲むと、缶をテーブルの上に置いた。

「悪い悪い。何かさ、以前の知っている香澄に戻ってくれた気がする、何だかうれしいんだ」

「ハルヒコの知っている私って、どんな私？」

「そうだな。いつも笑って……」

「それって、まるで私って、笑ってばかりいる頭の悪い人みたいじゃない？」

「……そうかもな」

ハルヒコはそういうと、笑顔を浮かべたままトイレのある一階へと下りていった。

香澄は再びビールを飲んだ。僕はただ、両手を宙に浮かべ、微

笑むだけだった。

それから彼女と一時間ほど話したと思う。

すると、突然、香澄は身を乗り出すようにして話をし出した。息を感じるほど近くに来た。自分の心臓が少し高鳴るのがわかった。すぐに隣りにいるハルヒコの顔を見た。彼はいつのまにか熟睡している。

「伊豆には怪談話って多いのよ。特に出るって、有名なトンネルがあるの」

「Tシャツからは彼女の小麦色に焼けた細い腕が見えた。

「出るって?」

「幽霊に決まってるでしょう。私、新車を買った記念に、嫌がるジローを連れて、その場所に行ったの?」

耳の中に「ジロー」という名がこだました。

「記念って、思い出に残る場所に行くんじゃないの?」

「幽霊に遭遇なんってことになったら、もう大騒ぎになるじゃない。記念に残るでしょう」

「……まあ、確かに。それはそうだけれど」

「その目的地のトンネルは、建設工事中に多くの人が死んだという噂があつてね。それが原因で、よく幽霊が出るといふの。しかも、その天井には斧が刺さったままというから、確かめに行くことになったの」

「斧はあつた?」

「……うん。トンネルに入って、ゆっくり走りながら、すぐに天井を見たわ。そしたらね。あつたのよ。斧が。もう、大騒ぎよ。それで、正面を見たら、フロントガラスが真っ白」

「えっ、幽霊」

「それがね。違うの。何もしないのにフロントガラスに細かく網の目のようにひびが入ってたの。驚きでしょう」

「ひび?」

「そうよ。恐怖と、新車のフロントガラスの破損で、大ショックよ。それに……」

「『それに……』って?」

「帰り道の途中で、私たちどうやら道を間違えたことに気付いたの。伊豆の道を知り尽くしている二人なのに、何処にいるのか全くわからなくて……。純白で深い霧だけが前方を覆ったわ。混乱していたのは事実だけど、どうしていいかわからないの。二十分近く走って、やっと知っている場所に戻ったから良かったけど、心臓が止まりそうだったわ」

「怖いね」

「……その後、彼が死んだの」

彼女の母が夕食時に言った言葉が、ふと浮かんだ。

「後悔したわ。心霊スポットになんて行くんじゃないかって。二日後、彼はフリー・ダイビングをしている最中に、死んだわ……」

「どうして?」

「死因はブラックアウト。私もよく知らないけれど、気圧の変化等が原因で気を失ったまま死んでいったそうよ。彼の仲間の話では、引き上げられた時には、もう心臓が止まっていたらしいわ」

『ブラックアウト』という言葉が、僕に恐怖を与えた。何もかもが暗い闇の世界に吸い込まれるように消えていく。それは体だけが残り、純粋な魂が、光の届かない海の底へと吸い込まれる……。

「私、今でも、あの日彼と見たトンネルの光景が目に残って来たの。何となくだけれど、あれが私の全ての幸せを奪っていったような気がして……。今でもじっと私のことを見つめたまま、幸せを吸い込んでいく気がする。それをどうすることもできないでいる私がいるわ……」

香澄は膝を抱え込むような仕草をした。そして、悲しい目をした。

「……気にすることは無いよ」

「わかっているの。彼が死んだことは偶然だし、過去はどうするこ

ともできないということもよ。でも、彼の死は、確実に私の何かを奪ったわ」

香澄はうつむいた。黒髪が緩やかに揺れている。

「きつとそれは私の魂の一部分だわ」

「忘れた方がいいよ」

「私もそう思う。でも、できないの。喪った彼の存在が日に日に大きくなっていくばかり」

窓の外から雨の音が聞こえてきた。ハルヒコは、軽い寝息を立て始めていた。彼女は立ち上がり、半分ほど開いている窓を閉めた。「ねえ、頼みをきいてくれる？」

うつむき加減で彼女は言った。僕はただうなずくだけだった。

「……抱きしめて欲しいの」

ハルヒコの方を見た。彼女はゆっくりと近づくと僕の前に膝を下ろした。

「ハルヒコが起きるよ」

「構わないわ。今抱きしめて欲しいの」

香澄はそのふくよかな耳を僕の胸へとつけてきた。雨が屋根を叩く音が響く。戸惑いながらも、彼女を両手で優しく包んだ。

「もつとよ。もつと強く」

固く彼女を抱きしめた。雨の音が激しく僕の心の中に響いた。

「まだ、足りないわ。もつと強く。離さないで、強く抱きしめていて」

腕の中で、香澄は微かに震えていた。髪の毛の香りが鼻を掠める。柔らかな体が、僕の力によって締めつけられていく。しばらくすると、両手を広げて抱きついてきた。その唇が僕に押し付けられる。微かな香水の香りと、柔らかなの感覚が広がってきた。

「こつちへ来て」

香澄は右手の人差し指を唇にあてながら、二階の奥にある彼女の部屋へと連れて行った。

中に入り鍵を閉めると、再び唇を重ねてきた。

時が止まっているようだった。

今起きている出来事が、まるで別な世界でのことのような気がした。

赤地に白い水玉模様の入ったカーテンが、目の中に焼きついて離れない。

ただ、なすがままだった。僕のベルトを外す金属音がする。それほど離れていない場所にいるハルヒコや、一階で眠っているであろう彼女の母親のことが気になった。激しい雨音の中に、どこからか波の音が聞こえてくる。僕のTシャツをゆっくりと脱がしていく。波の音は不安定に揺れながら、体の中に広がっていった。

翌朝、眼を覚ますと、部屋のテーブルの上には、メモが置かれていた。そこにはハルヒコがダイビングに出かけたことと、彼女が急に出勤することになったことが書いてあった。ベッドの枕元にある、写真立てを覗いた。笑顔の香澄と肩を組む男の姿がある。しばらくその写真を見つめた。死の影など何も無い。それをそっと置き、しばらくベッドの上でぼんやりとしていた。

その後、彼女の態度に変わりはなかった。

再び会った時には、いつもと同じ香澄に戻っていた。二人の間に起きた出来事は、錯覚のようにすら思えた。何度か髪の毛の香りや胸の形、思い出せるものを並べてみた。しかし、時間が経つほど曖昧になり、意味の無い妄想へと変化していった。陽気な香澄の中の何処に、あの切ない表情や、悲しみが隠されているのか。まるで想像がつかなかった。

夕方になるとビーグル犬のジローを連れ浜辺を歩いた。そこには必ずと言っていいほど、夕陽の中で遊んでいる子供たちの姿があった。僕は、ジローとともに、その子供たちを見つめた。何が楽しいのかわからないが、浜辺ではしゃぐ子供たちにははつきりとした笑顔があった。

悲しみなど無い、全てを喜びに変える世界がそこにはあった。

こんなにゆつたりとした時間を過ごしたのは、何年ぶりだろうと思つた。気が付くと休みもあと残りわずかとなっている。僕はその現実をうまく飲み込むことができなかつた。伊豆での生活は確実に自分の心を癒し、仕事で追われていた日々を開放してくれていた。ぼんやりと夕焼けで彩色された空を見つめっていると、何処かで呼ぶ声がある。タクだった。彼とはハルヒコに紹介されて以来、いつのまにか仲が良くなっていた。

「どうです。伊豆の生活は？」

犬がタクという青年の匂いをしきりに嗅いでいる。

「ええ。でも、そろそろ終わり。仕事に戻らなくては……」

「そうでしたか。ずっといてくれると私も話し相手がいて心強かつたのですが……」

「このままだと伊豆から離れられなくなりそうだから……」

僕はしゃがむと犬の顔を両手で撫でながらいった。先の黒い、長い尻尾が揺れる。

「うん、その気持ちわかりますよ。車で伊豆から帰る途中、現実に戻されるのが、嫌になるんですよ。月曜日には上司の嫌味を延々と聞かなければいけないし、空をゆつくりと見つめる暇も無い。人の温かさを実感することも無いし、潮の香りを味わうことも無いのですからね。僕も弱いのかな。週末が近付くと伊豆へ行く準備を始めてしまうんですよ。悪循環です。これって、逃避ですかね」

「……さあ、僕も似た立場だから」

「そうそう、ハルヒコさんプロポーズしたそうですね、香澄さんに。僕はあの二人、結構お似合いだと思っただけ……。香澄さん、オーケーしますかね？」

「そう」

初耳だった。焦る表情を隠すのに精一杯だった。

「あっ、知らなかつたんですか。これは有名な話なんですよ。香澄さんの彼氏だったジローさんとハルヒコさんはダイバー仲間で、よ

くうちの店に来てくれていましたね。ジローさんの事故があつてからは、香澄さんを精神的に支えたのはハルヒコさんだったんです。最近では、香澄を幸せにできるのはオレしかないって……。もうすでにプロポーズしているはずですよ」

「それ、いつ頃の話？」

「二か月ほど前ではないですかね？」

ハルヒコが香澄にプロポーズしている、と言つ言葉が自分の中で鳴り響いていた。

「まだ店の買出しの途中なんで。今度良かったら、都内で一杯やりませんか？ 連絡しますよ。それでは、また」

タクは犬の背中を撫でたあと、そこから離れていった。ハルヒコが香澄に恋している事実には気付かなかつたことをひどく後悔した。タクが帰つた後も、僕はしばらく立ち止まつたままだつた。何も考えることができなかった。ビーグル犬は、手に握られたロープをしきりに引つ張り続けた。

その日の夕食後時に、香澄の母に話しかけた。

「実はそろそろ、仕事に戻ろうかと……」

「あれ、あなた、今の仕事まだ続ける気なの？」

「ええ」

「ここにいればいいのにね。仕事だったら、給料は安いけど、紹介してあげるよ」

食器を片付ける手が止まると、香澄が「母さん」と口を挟んだ。

「駄目よ。変なこと言ったら。そんなこと言ったら困るじゃない」

「ハイハイ、今度休暇があつたら、絶対来ておくれよ。うちは大歓迎だからね」

香澄の母はテレビをつけると、小さな声で言った。

「有難うございます。あさつてには帰ろうと思ひます」

僕は軽く頭を下げた。

「仕事休んで駅まで送ろうか？」

香澄の声が、台所から聞こえる。

「いや、いいよ。悪いから。帰りは船に乗ろうかと思っているんだ。気持ち良さそうだし」

彼女は「そう」と一言いうと、食器を洗い出した。そのまま、何も話そうとしなかった。

部屋に戻り、簡単に荷物の整理を始めた。しばらくすると香澄が部屋をノックした。

「仕事、大変なんでしょう。頑張ってね」

彼女の透き通った瞳が見えた。その美しさに、一瞬言葉を失った。

「ああ、頑張るよ。君も元気で」

彼女は「うん」と答えると微笑んだ。しばらくすると、静かに扉は閉まった。用意されているであろう仕事を、僕は何処かでの場を去る言い訳にしようとしていた。

出発の朝、お礼の手紙と一緒に家の鍵を封筒に入れ、ポストの中に入れた。そして、ジローに別れを告げた。犬はしばらくの間、散歩へ連れて行ってくれるのだと勘違いし、はしゃいでいた。僕にはそれが少し悲しかった。残暑の日差しが、歩道をまぶしく照らしている。その向こうには海が、人魚の鱗のきらめきように揺れ続いていた。

松崎の連絡船乗り場に着くと、僕の到着を待っていたかのように、出発の合図が大声でかけられた。伊豆への名残り惜しさを実感することも無く、せき立てられることは少しつらかった。

動き出す船の振動を感じながら、ここで過ごした数日間の記憶を思い返していた。船は白い波を巻き起こすと、岸を離れて行く。その時、松崎町を見つめる僕の視線は黄色い物体を見つけた。

それは香澄の黄色いクーペのようだった。その傍には人影が見える。すぐに香澄だと確信した。人影は手を動かし続けている。思い

と裏腹に、船は素早く岸から離れていった。その姿はすぐに、親指ほどの大きさになった。

しばらくすると、彼女の姿は視界から全く消えてしまった。

三

僕は再び連日の仕事に追われ、睡眠不足が慢性化し始めていた。職場では上司の激しい罵声が鳴り響く。電話の音は鳴り止むことがない。自分の話す言葉が、まるで別の空間で動いている気がした。とにかく必死に何かを追いかけ、走っていた。

香澄から伊豆の様子を伝える手紙が何通か届いたが、返事を書く気持ちはなれなかった。もちろん仕事が忙しかったこともあるが、その方がお互いにとって良いように思えたのかもしれない。

彼女と再び会ったのは、三か月後のことだった。

終電で帰宅すると、僕のマンションの入口で蹲っている人影を見つけた。香澄だった。ジーンズに白いポロシャツ、小さなバッグを胸に抱えている。忘れようと努力していた。どうしていいかわからなかった。

「やあ、元気？」

香澄は僕を見て微笑んだ。

「どうして、ここへ？」

沈黙が続く。彼女は瞳をじっと見つめていた。

「住所をハルヒコから聞いたの。これをどうしても渡したかったから……」

香澄はバッグの中から白い封筒を取り出した。結婚式の招待状だった。新郎の欄にはハルヒコの名前が書かれていた。

「おめでとー」

「ありがとう。これだけはどうしても手渡したかったから。会えて

良かったわ。変よね。何となく、もう一生会えない気がして……」  
「……式には出席するよ」

彼女は「うん」といい、立ち上がった。

「そろそろ行かないと……」

「もう遅いし、少し休んで行ったら」

彼女はしばらく黙っていた。

「やめとくわ。ハルヒコが心配するし……。仕事がんばってね」

「ああ」

「ハルヒコの所まで送るよ」

「遠慮しとくわ……」

「そう」

大通りまで出ると、彼女は振り返って言った。

「……ねえ、私たち友達よね」

どう答えていいか迷った。その後

「もちろん」と、小さな声で言った。

「さようなら」

香澄は笑顔で手を振った。僕は

「じゃあ、また」と、手を振り返した。白いポロシャツが浮き上がって見えた。

#### 四

部屋の電話が真夜中に鳴り出した。

「すみません。伊豆で何度かお会いしたタクと言いますが……」

懐かしい声だった。

「香澄さんのこと覚えていますか？」

先日の手を振る彼女の笑顔が浮かんだ。

「どうかしたんですか？」

「……さっき、亡くなりました」

「えっ？ どうして」

「スピードの出し過ぎで、カーブを曲がりきれなかったようです。車ごと崖から海へ飛び込んだそうです。さっき彼女のお母さんから連絡がありました……」

「ハルヒコは？」

「寂しがるといけないからと、香澄さんのそばから離れないそうです」

「……そう」

「酷く落込んでいるそうです……」

返す言葉が見つからなかった。

「無理もないですよ。一度に家族の全てを失ったみたいなのですから」

「家族？」

「ええ、香澄さんのお腹の中にはハルヒコさんの子供がいたそうなんです」

言葉が体を通り抜けていった。

「これから伊豆まで一緒に行きませんか。今、解剖があつて、今日が御通夜だそうです」

タクの声が遠のいていく。

「聞いてますか？」

音が消えていく。香澄の笑顔が浮かぶ。崖から海へと飛んでいく黄色い放物線。

「どうしたんですか？」

彼女は何をあの日伝えたかったのだろう。お腹の子は？

目の前には、美しい伊豆の海岸線の風景が浮かんでいた。まぶしい太陽の光、波光のきらめき、時折そよぐ潮風。海鳥が自由に飛び回る姿。漁師達の笑い声、花火に目を見張る子供の瞳、笑う香澄の母親……。

そして、海岸線に車を止め、手を振り続ける小さな姿があつた。彼女の唇から出た切ない伝説が、何度も脳裏に蘇る。

「この島の伝説には、不思議な力があるの。どこか人の心を捉えて離さない力よ。私もどうやら、この島に引き戻されたのかもしれないわ。今も海の中を彷徨う、小雪の魂のようにね」

何処からか波の音が聞こえてくる気がした。

了

(後書き)

この作品は、数年前、伊豆文学賞に送るためにかいたものです。結果は入賞すらしなかったのですが、ちよつと思入れがある作品です。ちよこちよこ手入れをして、現在の形になっています<sup>1</sup>。執筆時、西伊豆の海の美しさをイメージして書いたのですが、伝わったでしょうか？ 読んでいただきありがとうございます。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6889c/>

---

潮騒の記憶

2009年6月27日05時20分発行